

ダンジョンに引っ張り
ハントイングをするの
は間違ってるだろうか。

EX BOX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンまちで単純にクロスオーバー系を無性に書きたりましたので書いてみまし
た。にわかの駄目人間が書いた作品です。続きが気になる不定期でもいいコメントを
書いてくれれば頑張って書きます。一応お試し感覚でやつてるんでクオリティを期待
しないでください。

僕よりも面白い話を作れるよつて自信のある方は同じ題材を使つて作つて大丈夫で
す。

目次

とてつもないネタバレと設定 — —

1

?話（漫画だと一話目の冒頭です。）

4

?話ベルくんの秘密の暴露 — —

—

???話（デート）上

—

???話「デート」中

—

デート中パート②

—

43 35 24 11

とてつもないネタバレと設定

この小説は2部からスタートします。

一部「ストライクワールド」

番外編「レン達人間の世界と7年前のオラリオ」

二部「原作編」↑今ここ。

一部のプロローグと言うか最初の一話の乗せる話はこの以下のような内容を予定している。

大まかな話は「ベルはおじいちゃんに英雄のお話を読み聞かせしてもらい眠りにつくのだがおじいちゃんは突如ベルの体が光に包まれたかのように発光し点滅してこの家に「ベル！」おじいちゃんの叫びが残る。目を覚ますとベルは煉獄の世界でひとりぼっちへとなっていた。そしてモンスターに襲われ体に傷が出来て大量の出血を起こしたベルは絶対絶命のピンチだった。そんな時マスターオーブを回収しに来た大天使長の一人である墮天する前の部隊がいた頃のルシファーにあい」そこまでが今回の小説本当の一話ですね。

そして二部ベルはあるエルフからスマホを返されるまではモンストと7年前のオラリオの記憶が無く知識は原作のベルと同じになる。

ベルの本来の力と記憶はスマホに封印されてるので二部最初は全くほぼ原作と同じだが僅かな残りカスがベルくんに残つてたため時々知らないはずの人の名前や使えないはずの魔法を使つたりしてる。

原作編の最初の頃ベルクラネルは20歳は越えてるのだが一部一話の大量出血により血液の輸血を必要としていただがそれだけでは無かつた大量の出血により臓器に深刻なダメージがはいり脳に障害が残ると天界の医師は言う。そこで彼の遺伝子に天使の遺伝子を組み合わせることにより半人半天使のキメラへと種族は変わるそれにより肉体変化が遅くなり老化現象が無くなつた。

これから後の後付けと大まかなストーリー構想

原作の一話通りアイズに一目惚れをするが（記憶を無くして）初めて美人を見たため見惚れてしまうが助けられた為か女性なのに格好いいや強いからなどベルの心情としては憧れに近いため原作通りベルはエイナに惚れたと聞かれ（一瞬どうなんだろうと悩

む）が返答は肯定するので一話はそんな変わらない。ベル自身は自覚してなくとも本能は理解しており原作だと普通に返答した所を今回は返答につまらせたのは一時的に異性に反応しただけで恋ではないと知つてたからだ完結に言うとベルとつてアイズはアイドルみたいなもんである。

ベルはおじいちゃんに少年の頃からハーレムを作れって言われ自分もそうしたいと憧れてたので自分に告つてきたら受け入れる気でいる。ベルくんは草食系なので自分で告つたりしない。（勇気がない）

?話（漫画だと一話目の冒頭です。）

遠い昔

僕たち神は君達子供達の暮らすこの下界に刺激を求めて降りてきたそして僕達は決めたこの下界で永遠に共に暮らそうと神の力を封印して、不自由さと不便さに囮まれて楽しく生きようつてね。

僕達が君たちに与えられるのはたつた一つ「恩恵」という名のモンスターと戦う力だけ与えられた子供達は、その神の眷属ファミリアとなるつまり君は僕の眷属ヘスティアファミリアのたつた一人のメンバーつてわけだ。

⋮

「待つてください神様これ!!仮面ライダークローク」の冒頭丸パクリじゃないですか!!いくら中の人と同じだからつてこうやつて文字数稼ぎはヤバいですよ!!。」

「うつさいなベルくんはそんなの気にしたら負けなんだよ内容だよ内容が面白ければ許されるんだから。」

ベルは思いだしへスティアに教えるのだがヘスティアは気にしない所か逆にベルが怒られるという始末になつてしまふ。

「どうなつても知りませんからね」

ちよつとベルくん理不尽に怒られて可哀想だつたがそれはさておきこんなグダグダな小説が始まります。

⋮

ダンジョン五階層に一人の少年がいた見た目は原作通りに年齢14?歳の少年?ベル・クラネルは好奇心故かギルド運営の職員の一人でベルくんのアドバイザーのエイナさんに忠告されていたのにこの深さまで潜つてしまつたのだ。

「ひい!?」

な⋮ なんでこの階層に出てくるんですか!?

「ブモオオオ!!!!」

牛のような見た目に筋肉はがつしりとした二足歩行の怪物ミノタウロスが突如として目の前から現れ目があつた瞬間に襲いかかってきた。

ミノタウロス本来は中層のモンスターで上層のモンスターではないため最低でもレベル2は無いと倒せないのだ。本来あり得ないからベルは完全に油断してたのだこの時ベルは思い出していたエイナさんのあの言葉を…

「あのねベルくん貴方だけじゃなく皆にも言つてるんだけどね冒険者は冒険してはいけないんだよ。」

「でもそれ矛盾してません？フレイヤファミリアとかロキファミリアとか特にアイズさんって一年でレベルアップしたそうじやないですか。とてつもない修羅場を搔い潜つて称号？何て言うんですかあの「え」とんと・あ！偉業を達成しレベルアップするんでしょなら強くなるにはダンジョンに冒険しまくつたほうがいいんじゃないですか？」

「だけどね命あつてこそだと私は思うの実はダンジョンってよく分かつてないの私もよく分からないけど生き物じやないのにダンジョンは生きているなんて言われててそれ故にイレギュラーが発生するなんて言われてるのだからダンジョンの探索はゆっくり自分のペースでいいから無茶だけはしないでねベルくん」

(ごめんなさいエイナさん忠告はちゃんと聞くべきでした。)

(ガジ)

ベルは逃げずその場へしゃがみ土を掘むそして彼は野球選手のピッチャー投げる構えを取り初動のモーションを

取る。

「取りあえずくらえ!!」

彼はミノタウロスに地面の砂の欠片を投げた脚に胴に腕とだが鋼のような肉体に当たつた瞬間欠片は碎け埃のように粉碎しミノタウロスはびくともせずベルクラネルに

迫りつつあつただが。

「ヴモオオオオオオ!?」

悶絶の如くミノタウロスは苦痛の声を上げた彼は悪あがきに顔面へと狙い目に当たつたのだ俗に言う目潰しであるそして彼は視界が回復しない内に逃げようとしたタイミングでミノタウロスの後を追つていたロキファミリアの少女アイズヴァレンシュタインが彼の目の前に登場した。

「リル・ラファーガ」

彼女の言葉と共に疾風が吹き現れミノタウロスを通り過ぎたと思つたらミノタウロスはいつもまにか斬られていたがそんなことは些細な問題で「ビシヤ」と切り裂ずから血が吹き出された。

「え！ ちよつうわあああああ」

⋮

フキフキ

「あの大丈夫ですか？」

その後のこと目の前の金髪の女性ことアイズはハンカチを取り出し顔だけでも拭いてくれた。

「は…： はい大丈夫ですよつてうわああああ。」

(凄い美女!!)

「ん、どうしたの急に驚いて？」

「な・な・な・なんでもないでしゅ‥‥（囁んじゃつた）／＼／＼

この時ベルはあまりにも美しさばかりに驚いてしまった。オラリオにくるまで彼には女性の出会いはなかつた田舎で同世代の子はいなく村から離れた場所でおじいちゃんと二人くらしだずーといたから耐性が無いのは仕方なかつた。

「し‥‥ 失礼しました!!」

「あ‥‥！」

彼は興奮したのか原作と同じくつい走つて上方へとも戻つていくそれを見てたアイズは名残惜しそうな声を出して手を伸ばし言う追おうと思ったが今はソロではなくチームとして来てるためこれ以上離れる訳には行かなかつた。

10 ?話（漫画だと一話目の冒頭です。）

? 話ベルくんの秘密の暴露

ある日のことダンジョンから帰還し自分のホーム帰つたら入り口で一人が血相を変えて仁王立ちしていた。

「ベ・ル・く・ん」「ベ・ル・さ・ま」

「ヒイ!!」

今僕は二人の女性に尋問を受けていた。くんづけで呼ぶ黒髪ツインテールで低身長に幼さが残つてる小顔に身に似合わないくらい胸がデカイまさにロリ巨乳こと僕の主神ヘスティア様と、さんと呼んだ女性のこと（リリルカ・アーデ）普段はリリつて呼んでるけどどちらみに特徴は茶髪にフード付きの白いパークー見たいなのを着ていて身長が110cmと子供のような身長だが小人族なのでこれぐらいが平均であるのだがその背丈にしては胸デカイなあーとそこら辺のおっさんから襲われないか心配だなあー… て途中から何を考えてるんだ僕は。

「何か変なことを考えてなかつたかいベルくん?」

「そ!!それは……後回しにしませんか」

答えを曖昧にさせることで嘘を見破れないようにする。神に嘘は通じないから質問に答えないか無視するかの二択しか残されてなかつた。

ヘスティア&リリ 「……」

ベル 「……（キヨロキヨロ）」

拳動不審のごとく目を四方八方に動かす。ベルクラネルという少年は嘘が下手くそだつた。正確に言えば嘘が付けないタイプであるそれゆえにヘスティアはベルにあえてスキル【憧憬一途】（リアリス・フレーザー）を隠してゐるのだが嘘が付けないから表裏がない人物で素直でありけして悪いことではないのだ。

「まあ後回しにしておくとしてベルくん今君のベッドで気持ちよく寝てるその金髪の女はいつたいどうしたんだい。」

「…… 答えないとダメかな?」

「……」

その間に二人は（あ！察し）見たいな感じでこの空間に気まずい空気が流れる。そしてその沈黙を破いたのはリリだった。

「ベル様素直に白状してください。リリは信じてますだから一緒に独房生活してきましょう。」

「ちよちよちよ誤解だよみんな」

「誤解ってどう考えたつてあそこでスヤスヤと寝てる彼女が物語つてるじゃないかいくら年頃だつて言つたつて誘拐は良くないよ確かに同性の僕からしても綺麗だなーと思ふよでもベルくん僕と言う者がありながら「ちよつと!!いつからベル様はヘスティア様の物になつたんですか。」つて割り込むんじやないよりリルカくん。」

ヘスティアの台詞に見逃せない言葉を聞きリリはツッコミを入れるこれは彼女にとっての大事な選択肢である。この（小人十神）達はベルに恋をしている。だからこそ絶対に譲れないものである。さつきみたいにヘスティアが自然に自分の彼女だと想い込ませようとしたのをそれがただの本音が漏れただけだとしても可能性は排除しなくてはならないのだ。

故に

「別に間違つてないだろだつて僕のベルくんはただ唯一（僕）の眷属なんだからね君には唯一の何があるんだい。」

「お言葉ですけどねそんなこと主張したつて何も意味ありませんよそもそも私達に子供達なんて言つてるんじやありませんかつてことはベル様も例外なくヘスティア様の子供つてことですよねつまり近親婚ですね。知つてますこの下界は近親婚駄目なんですよ。」

「へえーで？リリくん何だろう論点ずらして近親婚とか適当な発言して論破した気になつてるのでやめてもらつていいくつか。そもそも僕たち神が君たちを子供と呼ぶのは血縁的な言葉じやないのは知つててそんな発言してるんですカリリルカくん。近親婚つて血縁関係が近い者達を指すんですよつまり僕は下界の子供達と結ばれても関係ないそもそも僕たち神は不変なんで赤ちゃんを作れませんつまり関係ありませんーーん（ドヤ）」

「なにそのドヤ顔気持ち悪いですよ」

「んーだとこのちんちくりーんが!!」

僕をめぐつて喧嘩をするのである。

「ああ・・この様子じやすぐには終わりそうにないなよーしどさくさ紛れに逃亡するか。」

原作のベルなら二人の喧嘩を止めようと声をかけるだろうがこのベルは自分の保身といつも通りとすることで楽観視していた。この世界のベルくんは肝が据わっていてなおかつある程度の自由人でもあつた。

「ピーピーうるさい。」

さつきまで喧嘩をしていたヘスティアとリリルカアーデは第三者の声を聞き二人ともピタツと動きを止め聞こえた方へと向きを変えたそして二人は当初の目的を思い出す。

「さてと腹が減つたしあいベル」

「あ！はーい。」

逃亡しようとしたベルは足取りを停止させ女性の方へと歩み寄る。

「行くぞ。」

「豊穣の酒場ですね。」

「ちよつと待つてい!!」「無視すんな!!」そんな二人に待つたをかけた。明らかに視線を送つてたのにそんなこと初めから居ないようにはねられてとうとう喋り出した二人は金髪の女性へと歩み寄る。

「なに流れるように当たり前のようにベルくんはその女性とどつかに行こうとしてるんだい。」

「そうですよベル様きつちり話して貰いますよ」
同意するかのようにリリも言う。

そう言われベルは腹をくくつた本当は喋る気は無かつたし知らないなら知らないで別に困ることでもなかつたからだけど仲間にましてやヘスティア様は僕を唯一ファミリアへと迎えてくれた恩人である。もはや隠し事は良くないかと思い始める。

「分かりま 「グゥー」 した… その前に豊穣の酒場に行きません」

??? 「…」

ヘスティア&リリルカ 「何を言つてるん（だい）（ですか）！」

二人はベルにそうツツコミを入れるが（グゥー）と二人のお腹から鳴つた。流石に自身の腹が空いてることを自覚し三大欲求である食欲が出始める。

「しようがないな、後で聞かせて貰うからね」

「ええ腹が減つては戦は出来ませんからね」

ヘスティア様がそう言いリリも同意する。逃亡は失敗したが先伸ばしせずに覚悟を決めることが出来たことに気分は悪くはなかつた。

??? 「どうでも言いが早くしろよ。」 ??? の女性は小声で独り言のように茶番劇見たいなやり取りにツツコミを言う。

…

なんやかんや豊穣の酒場へたどりつき門をくぐる入店したことを知らせるための鈴がなり茶髪で猫耳の尻尾を生えた獣人族のメイド服を着てる女性アーニャが気が付く。

「いらっしゃいませーつて白髪頭!!今日はこんなに女を引き連れてどうしたんにや!?まさかそう言う関係か!ふしだらなやつだにや。」

「アーニャさん違いますつてそもそもそんな大声で言わないでくださいよ。」

「バカ猫こんななよなよした奴が女性に声をかけることさへ出来ないヘタレにやり得ないにや」

「クロエさんはバカにしに来ただけなんですか!?」

「違うにや単純にお尻を触りに来ただけ「D o u b l e バカ猫そんなにクラネルさんを

困らせたいんですか」ニヤ!?」

接客の対応に僕は困つてた時二人の後ろから緑色よりの薄い黄色の断髪で耳が少し尖つてたエルフの女性リューリオンさんが助けに来たようだ。リューさんは二人に交代の順番を伝え彼女達を睨む。

アニヤー「ふにゃー!?これはヤバイ!抜けるにや」

クロエ「あ!?バカ猫ずるいにや!?」

二人は危惧したのか一目散に元の持ち場に戻るその際にクロエはベルの尻を名残惜しそうに見ていたが。

「ではクラネルさん達はいつものカウンターで良いですよねシルが貴方を見かけてお待ちしています。」

そうして僕たち四人は案内され何故か僕はシルさんの隣に座らされ???の女性と挟まるようになつた。

カウンター席の並びを言うと

リリルカアーデ、ヘステイア、???の女性ベルクラネル、シルのようになつていてる。ベ

ルは特に不満はなかつた

「おかしいおかしいぞなんで僕がベルくんの隣じやないんだ!! それじゃ（ベルくーんそれちようだい）（しようがない神様ですねはいあーーん）（あーん）が出来ないじゃないか!!」

「何を言つてるんですそれは私の役目ですよそもそもなんで私が一番ベル様から離れてるんですか理不尽ですよ」

二人は溢れるばかりに不満が口から溢れ出る。そんなやり取りを無視して僕とシリさんと??の女性は先にメニューをこの店の店主であるミアさんに伝え先に食べ始めた。僕とシリさんはスペゲッティを食べ??の女性はオムライスを頼んだ。

ミア「おいあんたら二人ここは食べる所であつてただ喋るだけで席を占領するようなら出ていって貰うよ。」

「ひい…」

どうやらヘステイア様とリリはまだ頼んでなかつたようでミアさんに怒られて早口で僕と同じのを頼んだようだ別にとつさとは言え僕と同じのを頼まなくとも自分の好

きなのを頼めばいいのについて心でそう思いながら食べ続ける。

「ベルさん昨日から思つたんですがこの隣の女性つてベルさんの何ですか？私長いことこのお店で働いてますけどいつも独りつて感じで一匹狼のような感じだつたのにベルさんつて昨日初めて会つたはずなのに前から知り合い見たいな感じで今日は一緒に来てるし前からの知り合い何ですか？」

ヘスティア&リリ（なに！？）

二人は予想外の反応をするまさか彼女が前からベルくんと知り合いだつたとそして二人はたまたまシルの質問が二人の代弁をしてくれたかのようにそして二人はベルの方へと意識を傾ける。

ベル（どうどうこの時が来てしまつたようですね） そう心の中で言いジョッキを持ち一気飲みするベルは自身のポーチに手を入れ小さなケースを取り出す。

シル「え！？」

ヘスティア「うそ！」

リリルカ「なんで！？」

箱から中身を取り出し指の薬指にはめるつまり指輪であるそれぞれ反応が違うが皆驚いていた。そして次に注目するのは彼女だ。そして視線に気付いたのか彼女も自身の左手をサッと出す。

「まあそうゆう関係です。／＼＼＼

そう照れながらベルは関係を告白する。彼女はいまだに無言でいるが少し頬が赤くなつてるような気がした。その時だつた。ブーブーと何か震えるようなバイブ音が聞こえベルと??の彼女以外は知らない音にキヨロキヨロと発信源をさがすがベルはポーチから長方形のガラスがついた何かを取り出す

「見てくださいエルさん達が送つてくれた見たいで初めてハイハイ出来るよくなつたようですよ。」

「そうか…」

優しい笑みを浮かべる聖母のようにいやその顔は母親そのものだつた。そして僕と彼女がバイブルの正体スマホの画面二人で見てた時だつた。

「ちよつとまつてよ意味が分からないよその何だろうマジックアイテムと言ひ言葉ではつきり言えベルくん!?彼女のことも全部!!」驚きの衝撃に皆固まつてた中さすが年

長者であるヘスティア様はすぐに切り換え皆が知りたがつて質問を代表で聞き出す。

ベル「すみませんつい夢中になつてましたではまずこれはスマートフォンと言いまして簡単に言えば遠い場所の人に連絡することが出来き思い出を記録したり計算も出来き調べもの出来る万能のマジックアイテムだと思つてください。」その説明だけでヘスティア達は驚愕の反応をするさくがにいちいち反応を書いてたらきりがない（メタ発言）のでそのままベルは自身の秘密をさらけ出す。「まあ指輪のことなんんですけど彼女は僕の正妻なんです。色々とあつて離れ離れなつてたんですけど最近、何とか再会することが出来たんです。」

そう言いきつたベルはミカさんにビールのおかわりを頼むそしてまた一気飲みをしベルは彼女いや妻に声をかける。

「しかし驚きましたまさか僕よりも2か月前からこのオラリオに来てたなんて来てたら来てたとLINEしてくださいよ…」

「ルシファーサン。」

???話（デート）上

「あーたーらしい朝がきた！きぼーうの朝が♪（ピイツ!!）」スマホのアラームを止め時刻を確認する。

「えーと5：30…んうさーてそろそろご飯を作らなくちゃ。」

僕は洗面台の所に行き顔を洗う寝ぼけてた思考力が水の冷たさにより脳ミソを着火させたかのように刺激させ目を完全に覚まさせた。

「ふう!!さっぱりした!!さてとやっぱり朝は卵を使つた料理だよね。」洗面台から調理室へとたどりベルは今残つてる食材を見る「今日の全部使つて食材を買いに行こーと」今日はダンジョンを潜らず地上にいることを決め調理を開始した。
⋮

ゴーン ゴーン ゴーン

青空の下で祝福の音二人に鐘が鳴り響く。

神父「ここに貴方達は永遠の愛を誓いますか？」

「僕は勿論誓うよ」

なんて幸せなんだろう僕は…色々とあつたよね君はこのオラリオに来ていろんな

ファミリアに断られてそもそも諦めずに進んだから僕と君は出会った普通はあり得なさそうなのにそうなつたつてことはこれは運命だつたんだね。

ヘファイトス「まさか貴方がこうして結婚するとは正直今でも驚いてるわでも今はおめでとう」

「神へステイアそしてクラネル民おめでとうございます。」

「んぎいー悔しいですがベル様が幸せそうでなりよりです。」

「クラネルさん…」

「うう…ベルさん。」

神友のヘファイトスは驚きの感想を述べエイナは素直に祝福してくれてリリは悔しい思いを滾らせリユーはなんとも言えないような気持ちをシルは悲しく名残惜しそうに僕のこと：いや僕の夫の名前を呼んだ。そしてヘステイアは再度ベルの方へと向き直し唇を尖らせキスの準備を始める

さあベルく：ベルの番だよさあ早く誓うと宣言するんだ。

「僕はここにヘステイア様と
うん♪

「永遠の愛を」

うん♪♪

「誓いま～～」

ま～

「せん!!」

ヘスティア 「ま～せんその言葉を待つてたよさあチューだよベルく～ん? ません。
え?! ません?? ますじやないの?! ねえベルくん!!! これはどどどどどうゆゆ～～～～とだ
い。!!」 僕はあまりの驚きに尖らせた唇を引っ込ませ問い合わせ詰めるかのようにベルの肩を
掴み揺さぶっていた。

ベル 「……」

「ねえねえねえねえねえベルくん? 何か言つてよこれじやわからないじやないか(←)ん
? 指をさしてど・う・し・た!!」 (←)

(魔法の時間は終わります。↑)

「え!? 何? この石像の看板は? 所で皆どこに行つたんだい?! もお!! 意味が分からぬよ!! あ! そうだ神父くん君見てたよね皆何処行つたか分か?」「つてことでこの私ケセドは ヘスティア様の終わりの時間が来たことでこのウェーリングは破綻とさせていただきま す→!」 る。あの神父くん?」

何故か皆がいた場所は石像が何故かありそれが合図だつたかのよう神父は急に奇 声を発しながら終わりの合図を告げるヘスティアはさつきまでの神父のテンション とは明らかに違つていたので困惑する。

「ああ／＼／＼イボジイー（気持ちいい）」

ケセドと名乗つた神父は体が足元から崩れ始め泥のようになり地面へ一体化しそれ につられ周りの景色は青空から黒くおぞましい何かにかわり祝福の象徴だつた鐘も地 面へと落下しパリッと見た目の重量と見合わない軽い音を立てながら泥のようになり 地面へと一体化した。

「一体何が起きてるんだいこれ···（は!!）」

いきなりな急展開に困惑を隠しきれないヘスティアそんな彼女に危機が迫りそれは 自身か喋つてる途中で気づいた。

「う！動けない誰か誰か……あ！ベルくん僕を助け……て……ベルくん？」沼地に足を取られ助けを求めるヘスティアにベルはただ静かに振り向きもせず去っていく。

「え！嘘！！さすがに冗談だよねベルくん……ねえ！待つてよベルくんねえつたらお願ひだよだよベルくん僕を置いて行かないで……」それでもヘスティアの願いが届かぬ彼へ掴もうと利き手を伸ばし掴むしぐさをする。

⋮⋮⋮

「僕を一人にしないでくれ！！……はあ　はあ　はあ……」

本能により危機だと認知したのかとつさに体を起き上がる。呼吸が整い終わつたあとヘスティアは無意識に伸ばしてた腕を自分のぽっぺに近付け頬をつねる。

「なんだあゝ夢かあゝ。」

安堵したのか脱力しもう一回ベッドに身をゆだね倒れなんとなく天井を見る。

「……」

（一応考えてたほうが良いのかな……下界の子供は僕たち神とは違つて変化するんだか

ら)

悪夢をベルが去っていくあのシーンが印象に残り今後のことを考え始めた。ヘスティアは下界の子供達とは今もそしてこれからも一緒に居たいと考えているけど彼にはいや下界の子供達には寿命の概念がつきまとう。神にはそれがないだつて不变の存在なのだから共に歩むことは出来ないんだと彼女は突き付けられたそんな気がした。

ポタポタ…

(分かつてる… それは初めから分かつてたことじやないか… だけどやつぱりかなべルのことを思うと寂しくて寂しくて仕方ないよ。)

「あ！涙」

自身のベッドに雲のようなシミがありそれが自身が起こしたことだと自覚するそんな時だった。

(ギュルル)

「そう言えば腹がへつたな… お腹が空いてるからこんな思考になつてるんだなあーきつと、よーしそうと決まれば善は急げだ!! もしかしたら朝飯作り終わつてるかもしねいぞ。」 なんやかんやヘスティアは立ち直ったのかヘスティアは起きて食べる場所へ

と向かつた。

⋮⋮⋮

「フフーン♪」

キツチンに香ばしいバターの香りが広がる。今ベルはフライパンにてご飯を炒めており鼻歌をリズムに乗りながらフライパンを片手でチャーハンの cm みたいにパラパラとまぶしていく。

「私も手伝おうか？」

突如後ろから声をかけてきたのは僕の妻であるルシファードだった。

「うんお願ひ。」

今僕は火を使つてるので目を話せず言葉だけを返しす。（コンコン：パキリ）その擬音を聞き僕はコンロの端による。少したつたあと彼女は僕の横にならびフライパンを置いて卵を投入する。

「⋮⋮⋮（ジュー）」

二人はただ黙々と目の前に集中する食材が焼かれる音のみ響く。もうそろそろベルはフライパンを持ち上げ食材を皿に移す。そして彼女も焼けたのか卵をさつきベルが乗せた物にさらに乗せる。

ベルはケチャップを持つてきて「何かを書きながら食材にかけていく。ベル達が作つてたのはオムライスだつた。」

「さすがに恥ずかしいのだが。／＼／＼

ルシファーはオムライスにかけたケチャップの絵にたいしベルにクレームを入れる。

「んーそうかな？夫婦なんだし当然でしょ？」

ベルは素直な子で表裏が無い子なのだが天然と言うか一般常識を欠落していく少し自由人などころがあり思つたことをやるのである。

「とにかく二きりならともかく他の人にも見られるのは…。」

ベルはケチャップで♥？のマークを描きその中に（好き）と堂々と書くという愛情表現をしたのだ。だがさつきと言つたようにストレートに書きすぎなのだ。ルシファーがさつき言つてたことだが自分達2人の他にベルの主神であるヘスティアがいるのだ。まあヘスティアの家だからヘスティアがいるのが当たり前なのだが。

(Σ (△。111) ガーン!!。)

ルシファー（あ！ヤバい面倒なことに。）

ベル「そんなルシファーさん僕はただたんに好意でやつただけなのにあく嫌われた

のかも…だから冷たい態度を…ブツブツ」
（はあ～こうなることは分かつてたことなのに…）

心が傷つきネガティブとなつたベルは体躯座りになり涙をながしブツブツと独り言
を体力が尽きるか心の気分が変わるまで言い続けるのだ。

「分かつたからベル…」

「…何が分かつたんです…どうせ僕は…」

（これは重症だなあ…こうなるとあれしかないか…）

「僕は嫌われものなんだだつて僕はいろんなファミリアに断られそして今日は拒絶され
たんだそうにきま。」

：「!!」いきなり口が塞がれ驚くべル目を見開くと彼女の顔が近くにあり口に柔
い感触をキスをされたのだ。

「…//／＼

目がうつとりするベル頬を紅く染め思考も快樂へと染められていく。10秒くらい
した後お互いの唾液の糸を引きながら口を離していく。

「否定して悪かった…でも分かつてくれただろベル」

「… ルシファーさん（ウツトリ）」

今度はベルから歩みより再びキスをする。ルシファーは空いた両手をベルの腰に回し抱き締めるそしてベルも同じようにルシファーの腰に手を回し抱き締め合う。そんな二人の愛の空間に一人のムツツリスケベことヘステイアがたまたまその光景を見てしまい萌えていた。

（あわわわわ／＼／＼）

彼女はいつのタイミングで来てたかと言うと一回目のキスの時だつた。朝が幸いしたのだろう眠気により声を出す気力がなかつたことが幸いしたのか二人に見つからずその場から離れ気まずさの回避に繋がつたのだ。

（いいなあー僕がベルくんの彼女だつたらさつきの事とかあーんないこととも。ルシファーくんが羨ましい… 叶わない恋としらば僕を惚れさせその気にさせるような原因を作つたのは全部ベルくんつてやつの仕業なんた。だから責任取つて僕を貰え!! つて口で言えたらしいのになあー。）

心中でなんやなんや言いつつ嫉妬としたからといってぶち壊すことはしなかつたヘステイアはそれでも一緒に住んでる＝家族と見ており仲間なのでそんな真似は出来

なかつたのだ。その後腹がへつたヘスティアはタイミングを見計らつて何とか入ることに成功するのだがお腹の音が鳴り恥ずかしい思いをした。

???話 「デート」 中

「あの女邪魔ね」バベルの塔の最上階にいるフレイヤは神々のアイテムを使いベル達の様子を見てそう呟いた。「最初は穩便な方法で自分の物にしようと思つてたんだけどもう誰かの物になつてたの言うのならもう力ずくで奪うしかないわよね……あら?」
 「彼女の魂……不思議だわ1色だけではなく何色もあるなんて」それは思いがけないことだつたベルの魂の色とまた違う輝きが彼女にはあつた。

ベルの魂は白に近いのだが人が認識する白は光の赤外線の波みによりそれが目に入り認識してるので真の白とは違うだがベルの白とは極端に言えば透明＝無色といえる物だつた。はなから見れば空っぽにも見える物つまり人が認識出来ない何かであり本物と呼べる白の物だつた。

では彼女はどうだろうか白の反対はなんだろうか？黒だろうか……いや赤という意見もあるしかし今回ベルの色をあえて空っぽと表現した彼女の場合はオールカラー複数の魂の色をしていた。一つの魂にはその人を表すかの如く色があるのだが基本的に一種類なのだが自分の体は一つしかないんだから……二人を簡単に例えるならこうだベルが消しゴムなら彼女は紙を染める絵の具だろう。

ゆえに

「あの子の魂の光が増すわしかもお互に…」

二人は出会うして必然だつた。

「…」

フレイヤはもう一度考え方直していた。ここでもぎ取るのは勿体ないとまだまだ魂の光が成長するのならばと

「ねえオツタル一つお願いがあるのだけど」

「●●●●●」

「フレイヤ様の為すべくまさに…」

果たして何が起ころのかフレイヤの狙いは何か?

…

物語りの視点はベルのファミリアへ移る。

「モグモグ（＼＼＼＼＼）」

ベルクラネルは朝食を美味しそうに食うなか

「……」二人は気まずそうに食べていた。やはりケチャップででかく好きつて書かれてるのが原因だろう。

ヘスティア（：「どうしようまともにルシくんと話したことがないから気まずいぞ。なんで僕の家なのに僕が一番気まずくしてなきやいけないんだい!!よく考えるんだ僕……」必死に考えてもそもそも何について考えればいいかわからないのに適当に考えてるのでなにも思い付かず気まずくも現状維持を保とうとしていた。

「そういうえば私が2カ月も早くこの場所にいたのか話して無かつたな。」ヘスティアに思つてもいなかつたことだつたルシファーから会話を持ち出されることを彼女も気まずかつたのか定かでないがヘスティアはとにかく会話を聞くことにした。

「しかも複数来てたんですね？確かルシファーさんつてまだ監視される身ですからそもそもこれないはずですよね。？」

彼女はコーヒーカップを持ち上げ口に運び飲み一息ついてから話始めた。

「あることを条件に自由の身柄になつたんだ。」「自由の身つてことはもしかして」

「ああ異世界と往き来自由になれたからこれからは一緒に暮らせるようになつたと思えばいい。」

「それは良かつたです。：？でもそうする為の条件つてなんですか？それが2ヶ月前から來てたことに関係するんですか？」喜びを肯定し言葉を言うベルがある条件が引つき疑問に思い（どうゆこ？）見たいな表情を浮かべる。

「実はなウリエルからストライクワードに新たな危機が迫つてゐるのを聞いてな依頼を受けたんだがどうやらお前の世界に原因があることが判明したんだ。」

「……」

「このダンジョンの最下層にはマスターオーブが存在する。」

「あーなるほどねどうりでいきなり次元の裂け目に吸い込まれたと思いまれたといきやこの地に戻つてきた訳ですね。」ベルはそう言いながら自身の胸を撫でる。ベルは昔ストライクワールドへと飛ばされ重傷を負つていた。彼の胸にはオーブと呼ばれる玉が入つており延命していた。オーブには惹かれ合う性質があつたのだろう。

「ちよつと君達質問をいいかな。」

「どうしたんですか神様？」

「君達って何者なんだい。」

ヘスティアの当然の質問を聞き僕は記憶を振り返つてた。（そういえば神様には僕が少年期の頃とか話してなかつたな…まあどこかの悪神ならともかく神様なら話してもいいかな。）

「そういえば話してなかつたですね僕の少年期のこと…ろ…を…」

「どうしたんだいベルくん？急に話しがおかしくなつたぞ。」ヘスティア様の当然の指摘そんなことよりも今何分たつたのかスマホを開き時間を確認した。

「神様急いで食つたほうがいいですよアルバイトの時間が迫つてます。なんで明らかに時間が立つの早いですよ!!これも全部作者つてやつの仕業なんだ。」

「何だつてそれは本当かい!?…つてメタとネタを挟むな!!ああ!!ツツコミを入れてる場合じゃなかつたよ。!!」そう言いヘスティアは早食いをし食べ終えたら少女漫画のヒロイン見たいにバタバタと慌てて支度をする。

「じゃあ行つてくるよベルくーん」

「行つてらつしやい神様〜」

僕は手をふりながらルシファーサンと神様が出ていくのを見届けた。

「……」

天界……ストライクワールド……マスター・オーブ……懐かしいワードを聞いたなあー。あの時……僕が強ければもしかしたら……（僕はどうして弱いんだ。）

「ベル急に思い詰めたような顔してやつぱりまだ気にしてるのか？あの日のことを今さら仕方ないんじやないか。」

「分かつてますよルシフアーさん過ぎた過去はどうしようもないことくらい……だから今度は僕が強くなつてルシフアーさんを守つて見せます。」

「そうか」（私は安堵した彼はあの時を気にしていたがこうして笑顔で話せるくらい克服したことによつぱり私とは別の意味で強いな。）

「そう言えばベルお前レベルアップしたんだろ。ギルドに行つて担当者に報告しに行くんなら次いでだ私もついていつていいか。」

「それはいいですけどルシフアーさんつてギルドに行つてどうするんですか？」
「ダンジョンに潜る」

「え！」

…

ヘスティア「じやがまるくんはいかがかな。」

「おーこれが噂のそこのねえーちゃん一個くれねーか。」

ヘスティア「はいよ」（なんか独特な服だなあー）

??? 「んくうま!! 絶品かな絶品かなド派手にドーンだ。」

（そう言い彼女はお金をたくさん出してきた。しかも硬貨で一番高いやつを私はノルマ達成するから別にいいけどへんな子だなあー。）

「そこのねえーちゃん名前は何て言うんだ。」

えつへん僕はねヘスティアというカミサ「ヘスティアかあー覚えたぜねえーちゃん。」
マ： つて神の言葉を最後まで聞けえ!!。」

「あーいけねあー人に名前を聞く時は自分も名乗るもんだつたな。俺は石川五工門つて

言うんだしかと胸の中に名を刻んで起きな!!。」

そう言い彼女は去つていった。まるで嵐のような女性だった。そう言えば石川五エ門つて言つてたな? 極東出身なんだろうか。とてもじやがまるくんの味を気に入つてたからまた会えそうだなあ。

『デート中パート②

ギルド本部・応接室

「……はい？ もう一回言つてくれるかな？ ベル君？」

「はい！ Lv2にランクアップしました。」

「……いやいやいや！ そんなわけないでしよういくら何でも前もそんなやり取りしてオールEだつたのは驚いたよけど同時にあり得なくはないかなと思つたよけど、こんどはさすがに…… そう簡単に偉業をなせるものじやないのそれに生涯レベルを上げれず引退する冒険者がいるんだよそんな冒険者にたつてまだ1ヶ月くらいでなれるわけ……」

「嘘でしょ。（嘆然）」

「どうかどつこい嘘ではありません事実なんですエイナさん。」彼の背中に書いてある

ステータスにはちゃんとレベル2とかかれていてエイナは認めざるを得なかつた。

ベルは嬉しいのか両腕を手の親指を背中にさし腕を振るどうさをする。正直危なつかしい彼であるが何だろうかそんな嬉しそうな彼を見ると嬉しくなる自分がいるのだ。「分かつたわベルくん単独での探索を10階層まで許可します。しかし何度も言つてゐるけど無茶はしないでね。」

「はい!! (○(▽(○)」

「……」

(返事だけは良いのよね彼…：どうせ無茶なことをするんだろうなー初日の頃彼は私言つてたことを守つてたのにある日を境に彼が唐突にダンジョンで無茶なダンジョン探索をするようになつたのよね。)

あの日道端で私は見つてしまつた。ダンジョンからボロボロになつて帰つてきた彼をみた。全身傷だらけで足を引きずり壁に反りながら血の後をつけながら痛々しい彼を…：その時（私は彼がいなくなる）ではないかと連想してしまつた。そう思つた時（心が）苦しくなつた。どうしてそう思つたのか未だ分からぬ。でもいてもたつても

いられず私はの元に行く
⋮⋮⋮

「ベルくん何で!!言つたじやない冒険者は冒険してはいけないって!!」何故私は心配より先に怒つたのか分からなかつた。ただ彼は私の知る可愛いだけの少年の顔ではなかつた。

「⋮ それじや駄目なんだ⋮ 僕はもう失いたくない⋮」

とてもあの歳で出すような表情ではなかつた。まるで戦争を体験したような虚ろな目をしていた。結局その日以降未だその表情は見ていないけど何処かで彼が壊れそうかなつて思つたりした。

「そう言えば僕エイナさんに言わなきやいけないことがありまして僕のファミリアに入ってくれる人が来たんですよ。」

「へえ、良かつたじゃない。」

(⋮ ベルくんどんな子を勧誘したのかな?)

「んじや僕はその人を待たせてるので失礼します。」

ベルは直ぐ様扉まで急ぎ出していく。その人とダンジョンに行くのが相当楽しみにしてたのかな?

私はダンジョンの方向へ向いてる窓を探す。するとベルくんを発見した。元気そうに走る姿をみて微笑ましく見守るしかしエイナは一つ疑問を見つけてしまった。

「あれ? そう言えばベルくん一人でそのままダンジョンに向かってるけど所で待つてる子つて何処で待ってるの? 外で待つてたとかじゃないんだ?」エイナは不思議に思いながらも「とりあえず考えても分からないし持ち場に戻るかな」仕事があるので後で考えることにした。

一階において私は書類の仕事にかかるうとした時だった。「エイナ〜!!」私の同僚仲間であるミイシャが突然私の肩に両手で捕まり私をぐらんぐらんと揺らす。

「さ〜・さ!・さ!・さ!・さつき凄い綺麗なエルフがいたの!!そ!・そ!・そ!・れれれあああ」「とりあえずミイシャ〜 落ち着いて! ちよつと呂律がおかしくなつてるよ。」とりあえず私はミイシャの額にデコピンする。

(バチン!!)

「あ! イツタ!! くう〜:」

」

「ねえミイシャそんなに慌ててどうしたの？待ってあげるからとりあえず落ち着いて：ね？」

「そんな落ち着いてる場合じゃないよ!!弟君のファミリアに「それはさつきベルくんに聞い」綺麗なエルフの女性が入ったんだよ。」た：え？」「

「……」

「ねえ？エイナ急に黙つてどうし「それどゆこと!!」ヒイ!!」根掘り葉掘り詳しく述べて貰うわよ!!」ちよつと血相を変えたエイナ怖い!! ((； ツ。))

……

ダンジョン1階層

「まさかルシファーアーさんが冒険者登録するなんて思いませんでしたよ。しかし何で？」

「無断でダンジョンに潜つても良かつたが長期間滞在するからなそつちの方が良いだろ

うと判断したんだ。さて久しぶりに二人きりになつたんだ。なあベル・・ エスコートしてくれるか?」

「はい。」

ルシファーアさんが差し出した左手を僕は右手を差し出し恋人繋ぎする。自信の心拍数が上がることを意識し僕は先導する。ダンジョンと言う未開へ僕達は進む。エイナさんの言葉を破ることになるけど秘密の(デート)なんだ。

その後僕達は難なく降つてく。途中で色んなモンスターに狙われるがルシファーアさんのバリアにより傷を負うことなく二人の空間を過ごせた気がした。

⋮

17階層

広い空間に一匹もモンスターもなくすっからかんな場所へとでた。それも突然のはず何故ならゴライアスという階層主は遠征に出たロキファミリア達により(正確にはアイズ単体でぼこした)討伐されたため回復期間へと入つてたのだつた。

「⋮」

(さつきから付けられてるが、いつたい誰に?)ここは階層主のエリアな為基本的には他

のモンスターは入らないし基本的にはモンスターは他の階層へ移動することはないのだ。だとしたらそんなことをするのは〈冒険者〉でしかない。ヘルシフアーダから気付いてたが後を付けてる正体不明の冒険者は相当の腕であると言えよう。今一緒にいる感のいいベルが気づかないあたりれレベル5…いや6以上と言えるだろう。

「ベルちょっと前に来てもらつていいか?」

「え? どうして (ガサア) で… え?」

「え!! // //

前に立てと言われ彼女の前に来ると持上げられ逆お姫様抱っこされる。「ちょっと急になにを「歯を喰いしばれよ」するん… は?」
…

(俺はフレイヤ様に忠誠を誓った身だ。)

「ねえオツタル一つお願ひがあるんだけど。この綺麗なエルフ?ちゃんをく連れてきて>欲しいの。」
(どうしてだとか私情は挿まず)

「フレイヤ様の為すべくままに…」

そう言われさつそく俺は彼女を探しに行く。フレイヤ様が言うにはあの白髪の少年
といることが多いと聞いた。案の定お目当ての彼女が現れ後を付いていくことにした。

白髪の少年と彼女の後を付いていく、隠れる場所もなく見ながら他者を追跡するのは
ばれるから足跡と足音を確認しながら付いていく、だからばれてないと自信があつた。
だが違っていた。

それは17階層のことだつた。

トントン、トントン、トントン…

(足音が消えた?いや止まつたのか?いや何故止まる必要がある?この階層は特に何も
ないはず。…気付かれたか?…?いや、まさかな)

トン、トン、トトトトト

(足音が早くなつて走つてゐることはやはりばれたか。) その時オツタルは追いかけることと何故ばれたかつてことを考えてたことにより足音が一人分しかなくなつてることに気付かなかつた。

18階層に降りたオツタルはさつそく目の前に足跡を発見する。だがパツとみ見る範囲に足跡がありどの方向の道に行つたのか分からなかつた。
(どつちかを選ぶか：いやもし間違つてたら完全に見失つてしまう。しかも両方ダメーの可能性がないわけじゃない。)

「奴らが下層へと目指すなら先回りすればいい。」そう思い走り出そうとしたときだつた。

フワン

(背中からふんわりと存在しないはずの風圧みたいな風を背後から感じた瞬間だつた。)
「まさかこんな大物とは思わなかつたな。」

「！」

(まさかこの俺が背後を取られるとはな)

「初めてだなフレイヤファミリア団長のレベル7のオツタル。」

「… ほう俺を知つてゐるのか」

「…」

「何で僕たちの後をつけてたんですか？」

ベル達に心当たりなどなかつた。そもそも今この瞬間知り会つたばかりで相手のことをすらも知らないのだ。

「それは至極同然そこのエルフが〈我が主神フレイヤ様がお前に会いたがつてゐる〉からだ。

「…」「

(この人（こいつ天然なのか？）かな？）